

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 2 日現在

機関番号：17102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22792185

研究課題名(和文) 生体肝移植ドナーの自尊感情安定を目指した看護モデルの構築

研究課題名(英文) Construction of the nursing model aiming at self-esteem stability of the living liver donor

研究代表者

金岡 麻希 (KANAOKA, MAKI)

九州大学・医学(系)研究科(研究院)・助教

研究者番号：50507796

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円、(間接経費) 810,000円

研究成果の概要(和文)：生体肝移植ドナーの受ける手術は侵襲が大きく、術後は身体的合併症のみならず、抑うつといった精神症状を発症する場合もある。そこで本研究は、周手術期のドナーの体験と自尊感情の変化を明らかにし、術後の精神症状発症予防を目的とした、看護支援を検討することを目的に行った。

生体肝移植ドナーは、元来健常者であり、彼らにとって肝切除手術は想像を絶する体験であった。また術前高かった自尊感情は、術後では低下を示した。質的データの分析の結果、レシピエントを助ける意識が強いほど、術後は自分のことで精一杯となるギャップが自尊感情の低下に影響していることが示唆された。

研究成果の概要(英文)：Postoperative period, the living liver donor is exposed to the potential risks of not only physical complication but also mental complications such as the depression. The purpose of this study was to explore the experience of the perioperative donor and a change of their self-esteem. Furthermore the author considered about the nursing support for living liver donor in perioperative period. Living liver donor was a healthy person until they were hospitalized, and the hepatectomy was an experience beyond the expectation for them. The postoperative self-esteem score decreased than preoperative score. It was suggested that the donor who had strong intention to help their recipient, their postoperative self-esteem score decreased. Postoperative period, living liver donor could not afford to worry about their recipient, it might influence their self-esteem.

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学

キーワード：周手術期看護学 移植看護

1. 研究開始当初の背景

肝移植は1963年に実験的治療として世界初の症例が施行され、その後世界中で末期肝疾患の標準的な治療となるまでになった。欧米では脳死からの移植が大部分を占めているが、わが国では1997年の臓器移植法施行後も、脳死移植は年間数例にとどまり、恩恵を受けられる患者はごく限られている。そのため健康なドナーから臓器提供を受ける生体移植が大部分を占めるといった世界的に見ても特異な状況にある。1989年より行われた生体肝移植は年々増加の一途をたどり、2004年には肝細胞癌に対する生体肝移植も保険適用となった。現在の年間症例数は500例を超えている¹⁾。脳死からの臓器提供が主流であった欧米ですら、最近では臓器不足から生体移植がより推奨され、増加傾向にある^{2,3)}。これらのことから今後ますます世界的に生体肝移植症例数は増加すると予想される。

生体肝移植は小児に対する脳死ドナーの不足から進展した。開始された当初は胆道閉鎖症児に対する親をドナーとした医療であり、レシピエントとドナーの関係は親子であった。成人から小児への移植の成功は成人間の移植への応用へとつながった。しかし、レシピエントとドナーが成人同士の場合は、続柄・関係性も拡大し、移植の過程でさまざまな家族の葛藤が浮き彫りとなっている⁴⁾。海外の研究においても、成人間の生体移植では、臓器提供の決定過程で、実家と結婚後の家族との間の対立を引き起こすこともあると報告され⁵⁾、10%のドナーが家族の不一致・対立を経験していたと報告されている⁶⁾。レシピエントと健康なドナーの両者によって成り立つ生体臓器移植では、身体的、精神的、社会的側面を統合した包括的全人的医療行為が不可欠である。看護師は患者の身体的症状や状態に目を奪われがちであるが、レシピエントとドナーの術後の早期回復にあたっては、両者の術前から術後を通しての精神心理的状态の把握が非常に重要である。生体肝移植ドナーは、周手術期における体験を、まさにジェットコースターのような体験と表現している⁷⁾。ドナーやレシピエントの不安や葛藤、錯綜した感情は、そのような体験と関連するためか、術後に顕在化することが多く、術後の精神症状の発症率は28.6%と一般の手術よりも高い⁸⁾。加えて、移植が成功したにもかかわらず抑うつ症状を示すドナーも報告されている⁹⁾。さらに疼痛性障害、身体表現性障害(DSM-IV-TR)といった説明不能の身体症状や身体的とらわれを多数抱えるドナーも存在する。このように臓器移植では精神的問題は避けられない。

生体肝移植は治療として定着し、症例数は増加してきたものの、患者数は限られており、また、社会的コンセンサスも低いことから、他の疾患と比べ、体験を他者と共有できないといった実情がある。L.Festingerの社会的比較過程理論にみられるよう、人は自己評価を

正確に行い、環境への適応をはかろうとする存在である。したがって比較対象が存在せず、適切な比較がなされにくい場合は自己評価が不明確となり自尊感情も不安定になる。自尊感情が低いと否定的な感情を抱きやすく、自他の関係においても自己を委縮させがちである。生体移植医療が他の医療と異なる点は、レシピエントと健康なドナーの両者がいて成り立つ医療である点であり、他者であるレシピエントとドナーとの関係性が患者の精神症状に影響を及ぼすと考えられている。

本研究において、激動の時期である周手術期のドナーの自尊感情の動体を明らかにし、またそれを維持する看護モデルを構築することで、患者の物事に対する肯定的受け止めが高くなり、ジェットコースターのような体験である周手術期を乗り越えることができることを期待する。また、ドナーの自尊感情が高く維持され、またそれにより、移植を肯定的に捉えることができるのであれば、レシピエントとドナー間の良好な関係継続への支援にもつながり、ひいては移植後の長期QOLの上昇を目指したさらなる発展につながる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、生体肝移植ドナーの周手術期の自尊感情の変化を明らかにすることである。さらに精神症状発症予防のための生体肝移植ドナーの周手術期の自尊感情の安定を目指した看護モデルの構築を試みる。

3. 研究の方法

1)用語の定義

周手術期：生体肝移植ドナー手術のための入院初日から、手術を経て退院までの期間。

自尊感情：自己の全体に関する価値観や態度

2)研究デザイン

量的データと質的データを同時に収集するMixed Methodを用いた。

3)対象

家族である肝疾患患者(生体肝移植レシピエント)のために自らの肝臓提供を目的に肝切除術を受けた者(生体肝移植ドナー)。なお、レシピエントが劇症肝炎等で緊急手術である症例は除外した。

4)調査内容および調査方法

自尊感情の測定には、Rosenberg¹⁰⁾の自尊感情尺度を用いた。Kernis, Grannemann, & Barclay¹¹⁾は、自尊感情を短期間で変動するものとして捉えている。本研究も彼らの研究を踏まえ、術前に1回、術後7日目に1回の計2回にわたり尺度による測定を実施した。さらに今回の対象期間は周手術期とより限定した短期間であり、尺度による数字のみでは顕著な結果が出ない可能性も考えられる。そのため、周手術期の生体肝移植ドナーへの参加観察と、術後に半構成的面接による質的データ収集も行った。

5)分析

自尊感情尺度結果は、術前・術後それぞれの調査時点の平均点、標準偏差を算出した。また術前と術後の比較をするために、統計解析ソフト SPSS Ver.19 を用いて、対応のあるサンプルの t 検定を行った。なお両側検定で、有意水準を 5% とした。

6) 倫理的配慮

本研究は研究者の所属機関の倫理審査委員会の承認を得て実施した。対象者には入院当日に研究内容について口頭と書面による説明を行い、書面による同意を得た。また、術前・術後とデータ収集を行うが、その内容が決してレシピエントに伝わることをないことを保証した。さらに術後の半構成的面接は身体的・精神的疲労を最小限にするよう、対象者の体調を確認しながら 1 回 30 分を目安とし、長時間になるようであれば、休憩を入れて実施した。

4. 研究成果

1) 対象者概要

本研究対象者は男性 8 名、女性 7 名の計 15 名であった。平均年齢は、 36.0 ± 8.0 歳、レシピエントとの続柄は、子 8 名 (53%)、親 1 名 (7%)、きょうだい 3 名 (20%)、配偶者 3 名 (20%) であった。なおドナーの術式は、肝右葉切除術 10 名 (67%)、肝左葉切除術 4 名 (27%) 肝後区域切除術 1 名 (7%) であった。3 名 (20%) に軽微な術後合併症 (創離開、胆汁漏) が見られたが、再手術等はなく、術後平均 12.8 ± 3.9 日に退院となった。

2) 周手術期の自尊感情の推移

自尊感情の平均値は術前 31.6 ± 2.9 、術後 28.5 ± 3.5 であり、術後は有意に低下した ($p = .030$)。この自尊感情の低下について、質的データ分析結果のコードを用いて説明する。以下〈 〉は、コードを示す。

術前は手術の不安よりもむしろ〈生体肝移植へこぎつけた安堵〉を示していた。ドナーは〈レシピエントの余命を知らされ〉〈移植しかない〉と認識した状態で肝臓提供を決意し、手術のために入院していた。また、家族内に自分以外のドナー候補者がいる場合も、いない場合も、最終的には〈自分しかない〉と認識していた。この認識は自分の存在意義にもつながるものであり、術前の自尊感情の高まりにつながったと考えられた。

しかし、元来健康であるドナーにとって、多くは手術も初めての体験であり、肝切除術は〈想像を超えた身体侵襲〉であった。そして術直後は〈自分のことで精一杯〉な状態であった。時間の経過とともに〈レシピエントへの関心が出現〉してはくるものの、ドナーはこの時期の体験が自尊感情の低下をもたらしたと考えられる。

3) 自尊感情安定を目指した看護への示唆

本研究の対象者に対しては、抑うつに関するスコア等は測定していないが、全員臨床症状としての問題はなく、無事に退院の経過をたどっている。しかし、周手術期においては、

自尊感情が有意に低下することが明らかになった。

生体肝移植のドナーは、わが国ではレシピエントの 6 親等以内に限定されており、レシピエントのキーパーソンであることが多い。また、入院前はレシピエントの日常生活の援助も行っていることが多く、ドナーは術前から「レシピエントのために」「レシピエントを助けなければ」といった思いを抱いている。また、元来健康であることから、自らの術後の状態を想像することは難しい。これらのことからドナーは、術後もレシピエントに対して、自分が何かしら行いたいという気持ちを持っているが、それが叶わなかったことで、自尊感情が低下していると考えられた。周手術期にドナーに関わる看護師は、術前からドナーに対して、健常者ではあるが、今回は患者となり、自分自身の回復に集中することを説明するとともに、術後もそのことに集中できる環境を提供することが重要である。

4) 本研究の限界と今後の課題

今後は本研究で検討した看護ケアを用いた介入研究を行い、看護の適切性を明らかにしていく必要がある。また今回の自尊感情は、術後は 1 週間での測定値であるが、さらに時間を追っての経過も観察し、QOL と合わせて考えることでより充実したドナー理解に役立てることができる。

References

- 1) 日本移植研究会：日本移植学会 2006 年症例登録 統計報告 肝移植症例登録報告(第一報), 移植, 42(5), 423-426, 2007
- 2) 矢永勝彦：肝移植の歴史と現況, 臨床と研究, 82(1), 132-135, 2005.
- 3) 森根裕二他：生体肝移植の現状と将来展望, 外科治療, 91(3), 315-324, 2004.
- 4) 渡邊朱美：生体肝移植のために臓器提供者を決定する家族の意思決定プロセスモデルに関する研究, お茶の水医学雑誌, 1-2-3, 27-53, 2007
- 5) Franklin Pm, C. A. : Live related renal transplantation: Psychosocial, social, and cultural issues. Transplantation 76, 1247-1252, 2003
- 6) Paradel FG, L. M. : Patient's attitudes about living donor transplantation and living donor nephrectomy. Am J Kidney Dis 41, 849-858, 2003
- 7) Charlotte C.Cabello et al. : Roller coaster marathon: being a live liver donor, Progress in Transplantation 18(3), 185-191, 2008
- 8) 赤沢千晴他：生体肝移植術を受けた成人レシピエントの術後精神症状の有無と心理・身体的要因との関連について, 日本移植・再生医療看護学会誌, 4(2), 3-14, 2009
- 9) Fukunishi, I. et al. : Alexithymia

characteristics Before and After
Living donor Transplantation,
Transplant 35, 296, 2003.

10) Rosenberg, M. : Society and the
adolescent self-image. New Jersey:
Princeton University Press, 1965.

11) Kernis, M.H., Grannemann, B.D.,
& Barclay, L.C.: Stability and level of
self-esteem as predictors of anger arousal
and hostility. Journal of Personality and
Social Psychology 56, 1013-1023, 1989.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に
は下線)

[学会発表] (計 3件)

①金岡麻希、宮園真美、木下由美子、富岡明
子、孫田千恵、潮みゆき、中尾富士子、中尾
久子、川本利恵子：生体肝移植のレシピエ
ントとドナーの周手術期における交流の実
態とその相互作用，第31回日本看護科学学
会学術集会，2011年12月02日，高知文化
プラザかるぽーと。

②金岡 麻希：成人間生体肝移植ドナーの周
手術期におけるレシピエントに対する思いと
それに伴う行動，日本移植・再生医療看護
学会 第8回学術集会，2012年10月13日，
京都大学百周年時計台記念館 百周年記念
ホール。

③Maki Kanaoka : Current situation and mutual
effects of perioperative interaction between
transplantation recipient and living donor, 22nd
Annual International Transplant Nurses Society
Symposium, 21-23 SEPTEMBER, 2013/
WASHINGTON, DC

6. 研究組織

(1) 研究代表者

金岡 麻希 (KANAOKA, Maki)

九州大学・大学院医学研究院保健学部門・
助教

研究者番号：50507796

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし